1．交通戦争
2．広域公害対策を
3．秋の交通安全運動に思う

マンスリトピックス

1．交通戦争という言葉通り，現在わが国の交通事情は，その死傷者の数の上だけでも，まさに「戦争」の名に価する。

戦後の荒廃の中で，だれもが産業の高度成長とそれによる経済の安定を望みそして 20 余年。今や自動車は国の基幹産業にまで成長した。それはまた，自動車の大衆化を促すことになった。現在わが国では 1 400 万台もの自動車が走りまわっているという。だが，それに対して道路状況や，マイカーを持ちながら常に路上駐車しなければならない住宅事情は，あまりにも後手にまわっているように思う。いま話題の「自動車新税」については，いろいろの見方があろうが，この気違いじみた交通事情を少しでも打開してゆくものとして一考の余地があろう。

われわれ土木技術者としては，科学的に将来人間の生活に応じた車やその施設の必要量そのほか，道路・高速度鉄道など公共的大衆輸送機関の増強など総合的対策・検討が必要であろう。

それにしても，歩道のあるのは都市の幹線道路だけ，わが国の大部分の道路は人と車の混合である。人は広くもない道の片すみにおしやられる。これでは事故がおきないほうが不思議である。人命軽視もはなはだしいといわねばならない。

戦時中は国のためにと個々の命を捧げ，今はまた「車」によって個人の命は縮められんとしている。さきほど警察庁より発表された「道路交通法」も，結局最後は個々の人々が守るかどうかに問題が帰着される。いま一度人間回復を叫びたい。 [C]

2．Sutton がイギリスで 1 本の煙突から放出される煙による環境の汚染を計算する式を提案した頃は，イギリスでもそれほど多くの工場群はなく，大気汚染の問題も個々の煙突から排出される煙を考えるだけで良かった。しかし今やわが国では，大げさな言い方をすれば日本全土が公害源となりつつあるといってよく，各地区から排出される汚濁物質が互いに重なり合って，広域的な環境汚染をもたらしている。このことは，工場がいっせいに休暇に入る正月 3 ヵ日には，周囲にあまり汚染源のない場所でも空気が澄み，河の水がきれいになるのを見てもわかる。このような状態では環境汚染のひどい地域で，その行政区画内に存在する汚染源に対し対策を立ててみたところで，環境はたいして浄化されない。最近公域水道，公域下水道が建設され，成果をあげつつあるように，首都圏，近畿圏全体の大気汚染対策，東京湾，瀬戸内海全般の水質汚染対策といった広域公害対策が，国土開発，広域計画と関連してとられねばならないと思われる。 [J]

3．今年も秋の全国交通安全運動が実施され，警察官が小学生の登下校を自動車の脅威から守っている情景がそこかしこに見られる。今から 50 年前，おずおずと都市内に入りこんできた自動車は，急速に成長を続け，今や人間の生活に大きな影響を与えるに至った。

昨年 84 万人の死傷者を出し，今年も 9 月までにすでに 71 万人の死傷者を数えている自動車事故を考えた場合，交通安全運動の主旨はまことに結構であるといえる。しかし，都市内交通の手段としての自動車を考えた場合，このまま推移してよいとは決して言えないのである。

人間の生活の利便のための都市ならば，今後都市計画の面でも人間の生活を動的にとらえ，都市内の人間の移動は，安全ということを第一に考えていかねばならない。都市はどんどん発展を続けるのであるから，交通施設をこれに先がけて整備していかねばならないことはもちろんであるが，都市の性格から考えても，一人あたりの専用空間の少ない方向へ進まざるを得ないと考える。それにはまず，地下鉄道，高架鉄道，等の大量輸送機関のネットで都市のあらゆる部分をカバーすることを考え，これに水平方向，上下方向の補助的な小移動の輸送手段を考えてゆくべきであろう。

人間が機械に滅ぼされる時代というのは決して SF 的な遠い将来のテーマではなく，身近かにせまっているのである。 [S]